



👁️👁️ みどころ

『パッション』(04年)はイエス・キリストの受難の姿に焦点をあてていたから、誰もが涙したはず。しかし、「聖書の完全映画化」を謳う本作は、どの「史実」を描き、どの「史実」を省くのかの選択が難しい。さらに、イエスが見せた数々の奇跡をどう表現するかが大きなポイントだ。

イケメンすぎるとの「批判」もあるが、イエスの説得力は十分。武力や権力による世界ではなく、愛による世界が形成できれば何とすばらしいことだろうと思わせてくれる。しかし、スクリーン上で見る数々の奇跡の姿は、ちょっと手品気味・・・？

その受け止め方は人それぞれだが、10年に1度くらいはイエス・キリストの生涯とその活動を学習し、今の世界をどう生きるかの参考にしなければ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■イエスの生涯を描いた必見作が10年ぶりに誕生！■□■

イエス・キリストの生涯を描いた映画は多い。私は、マーティン・スコセッシ監督の『最後の誘惑』(88年)は観ていないが、『キング・オブ・キングス』(61年)、『奇跡の丘』(64年)、『偉大な生涯の物語』(65年)は観ているし、メル・ギブソン監督の『パッション』(04年)、『シネマルーム4』261頁参照)は必見作だった。また、1960年の第32回アカデミー賞最多受賞作となったチャールトン・ヘストン主演の『ベン・ハー』(59年)にも、イエス・キリストが少しだけ登場していた。

私はクリスチャンではないが、中高校時代を「愛と光の使徒たらんこと」を目指したキリスト教系の学校である愛光学園で過ごしたこともあり、キリスト教には興味があるし、

イエス・キリストの生きザマと死にザマには大いに興味がある。したがって、今から10年前に『パッション』を観た時は、途中思わず涙が溢れ出るのを抑えることができなかった。しかして、そこでは「タイトルどおりのすごい映画」から始まり、「私とキリスト教」、「キリストの映画と明治天皇の映画」、「2人のマリア」、「12人の使徒たち」、「4つの福音書」、「映画の理解に不可欠の時代背景」、「その他、多くの学ぶべきこと」という小見出しで、詳しくその評論を書いているので、ここではそれと重複するものは省略したい。

■□基本知識の吸収と新たな知識の吸収は？■□

『ノア 約束の舟』（14年）は旧約聖書の「ノアの方舟」を映画化したもの（『シネマルーム33』196頁参照）。また、近々公開されるリドリー・スコット監督の『エクソダス：神の王』（14年）はチャールトン・ヘストン主演の大作『十戒』（57年）と同じく、モーゼに導かれる「出エジプト記」を映画化したもの。さらに『天地創造』（66年）は旧約聖書に書かれている神



「サン・オブ・ゴッド」発売元：20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン
Photo: Casey Crafford © 2014 LightWorkers Media Inc. and Hearst Productions Inc. All Rights Reserved.

様がこの世を創造した物語を映画化したものだ。その他、アダムとイヴの物語をはじめ、旧約聖書の物語やイエス・キリストの生誕にまつわる物語は山ほどあるが、本作はそれらについては導入部でそのポイントだけを要領よく説明している。したがって、ベツレヘムの洞窟で聖母マリア（ローマ・ダウニー）の子として生まれたイエスの映像も一瞬のみだし、洗礼者ヨハネ（セバスチャン・ナップ）から洗礼を受けるシーンも一瞬のみだ。

そのような約10分間の導入部を経て、イケメンすぎるとの批判を出された青年イエス（ディオゴ・モルガド）が登場し、まずはガリラヤ湖の漁師ペトロ（ダーウィン・ショウ）に対して奇跡を行うストーリーが示される。イエスには後に裏切り者となるユダを含めて12人の弟子が集まったことがよく知られているが、ペトロが漁師であったことを私は本作ではじめて理解できた。さらに、「マタイによる福音書」で有名なマタイが、ローマ帝国の徴税人であったことも新知識として吸収できた。他方、「罪なき者のみ石を投げよ」で有名なマグダラのマリア（アンバー・ローズ・レヴァ）の物語は誰でも知っているが、『パッション』以来10年ぶりにスクリーン上でそんな説得力あるシーンが展開されると、ここでも思わず涙が・・・。

■□■イエスが見せる数々の奇跡を、あなたはどうみる？■□■

伝道活動を広げる中でイエスが見せる数々の奇跡については、当然賛否両論があるだろう。私は基本的にそれを信じているが、スクリーン上で見えるのはまるで手品のような奇跡だから、それを目の前で見た当時のユダヤの人は信じられても、スクリーン上でそれを観る現代の人々は信じられないのでは・・・？オウム真理教では、教祖・麻原彰晃の「空中浮遊」の奇跡が多く、信者を呼んだが、嵐の中、船の操縦に苦しむ弟子たちの前に水の上に立ったイエスが現れ、弟子たち



「サン・オブ・ゴッド」発売元：20世紀フォックス
ホーム エンターテインメント ジャパン
Photo: Casey Crafford © 2014 LightWorkers Media
Inc. and Hearst Productions Inc. All Rights
Reserved.

を導く姿を見ていると、「アレレ、これってホント？」とつい思ってしまう。また、イエスの教えを聞くために集まった多くの人たちに振る舞うためのパンと魚を即座に生み出す奇跡も、ひょっとして何かネタがあるのでは、と思ってしまう。

クリスチャンはそうではないのかもしれないが、本作がスクリーン上で見せるイエスの数々の奇跡の様子は、客観的にみてあまり説得力があるとは言えないのでは・・・？

■□■政治的、軍事的、宗教的背景のお勉強もしっかりと！■□■

西暦2014年の今は、イエス・キリストの生誕から2014年後であることや、来るべき12月25日にはイエス・キリストの生誕を祝うクリスマスの日であることはよく知られている。しかし、ベツレヘムで生まれたイエスが青年となり、伝道活動を始めた時代の政治的、軍事的、宗教的背景がどのようなものであったかを、しっかり把握している人は少ないだろう。

世界情勢の2014年最大の焦点はイスラム国の脅威となった。12月5日付朝日新聞は「その影響力が世界最多の2億人のイスラム教徒を抱えるインドネシアなど、アジア・オセアニア地域にもじわじわと広がっている」と報じて警鐘を鳴らしたが、さて、具体的かつ確実的な対応策は？第二次世界大戦でナチス・ドイツによって弾圧されたユダヤ人の国・イスラエルが建国されたのは1948年。しかし、イスラエルとアラブ諸国との対立抗争は今日までずっと続いている。

しかして、本作では①ローマからエルサレムの総督として遣わされたピラト（グレッグ・ヒックス）、②ユダヤの大祭司・カイアファ（エイドリアン・シラー）、そして③イエスの伝道活動に「律法」の立場から、ことごとく異を唱える律法学者が登場する。伝道活動を行う先々で弟子を増やし、熱狂的支持者を増やししながら、さまざまな奇跡を見せつけるイ

イエスに対して、律法学者やユダヤ教の大祭司カイアファが恐怖を感じたのは当然。そして、それはローマ帝国の総督としてエルサレムを治める、権力者たるピラトも同じだった。もっとも、イエスの教えは、今年9月から行政長官選挙の民主化を求めて香港の大通りで続いている「占拠運動」があくまで「平和的戦術」を目指したのと同じように、武力を否定し、政治的革命を否定するものだったから、ピラトとしてもその扱いは難しかった。

他方、イエスの弟子の1人であるユダによるイエスへの裏切りは有名なお話だが、ユダの裏切りを利用した大祭司カイアファの立てた、イエス攻略の戦略は？これは誰でも知っている「史実」だが、本作はとりわけその点を克明に描いているので、それをしっかり確認したい。

■□■ 10年ぶりに、イエスの受難に涙！ ■□■



「サン・オブ・ゴッド」発売元：20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン
Photo: Casey Crafford © 2014 LightWorkers Media Inc. and Hearst Productions Inc. All Rights Reserved.

本作は「全世界大ヒット作品」らしいが、イエス・キリストがイケメンすぎるという批判が殺到したから面白い。さらにネット上にある「チャイのブログ」を読むと、①時系列が前後していることがあった、②2つの別々の話を1つにしてしまっている、③イエスの人間味が足りない、④簡素化しすぎていると思う部分が多々あり、⑤上記も含め

て、悪い意味で、聖書どおりではない、⑥入れて欲しかったシーンがある、という批判を並べつつ、「映画では何度か涙しました」と書かれている。

『パッション』はユダの密告によって捕らわれ、裁きの結果、むち打ちの刑に処せられ、さらに十字架を自ら背負わされて刑場に向かい、ついに磔によって「死亡」するという、キリストの12時間の受難の様子を生々しく描いたものだった。しかし、『サン・オブ・ゴッド』というタイトルの本作は、プレスシートによれば「救い主（メシア）としてこの世に現れたイエス・キリストの誕生から復活までを聖書に忠実にたどりながら、歴史的な背景とその深淵に潜むミステリーをわかりやすく解き明かしたスペクトル巨編」。イエスの生涯とその復活までのストーリーのネタは山ほどあるから、その中のどれを描きどれを省くかはクリストファー・スペンサー監督の主観に委ねられることになる。

しかして、本作でも『パッション』が描いたのと同じように、イエスが十字架を背負って歩いていくシーンとゴルゴダの丘で十字架に縛りつけられた上で磔にされるシーンに十

分時間を割いているので、それに注目！私は『パッション』以来10年ぶりにスクリーン上で観るイエスの受難に涙したが、さてあなたは？

■□■イエスの「復活」をスクリーン上でどう表現？■□■

前述のように、伝道活動の中でイエスが見せる数々の奇跡の様子は、少し手品（マジック）めいているため、ただには信じられない感がある。それは、死亡した友人のラザロを死から甦らせるシーンでも同じだ。本作のハイライトは『パッション』と同じく、イエスが十字架を背負って歩き、磔にされる受



「サン・オブ・ゴッド」
発売元：20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン
Photo: Casey Crafford © 2014 LightWorkers Media Inc. and Hearst
Productions Inc. All Rights Reserved.

難のシーンだが、『サン・オブ・ゴッド』というタイトルで「聖書」の完全映画化を謳う以上、イエスの「復活」の姿をいかにインパクトと説得力を持って描くかが本作最大のポイントになる。あの当時のお墓がどうなっていたのかについては、日本のような火葬ではないため、それ自体をちゃんと確認する必要があるが、ここではそれを横に置き、イエスの死亡3日後にイエスの墓を訪れたマグダラのマリアが目にしたものに注目！

イエス（の死体）が入っていたはずの棺がカラッポになっているだけならまだしも、本作では光の中に浮かび上がるイエスの姿が登場するし、マグダラのマリアに対して話しかけもするから、その「復活」の再現はある意味で生々しいものになっている。マリアは直ちにこれを他の弟子たちに伝えたが、それをすぐに信用した弟子は何人いたの？そんな弟子たちに対して再び光の中に姿を現したイエスは、「私の姿を見たから復活を信じるのではなく、ただただ私の言うことを信じなさい」と教えていたから、そのことの意味をしっかりと考えなくちゃ・・・。

本作は、そんなイエスの復活を目の当たりにした弟子たちが、以降伝道の旅に出るところでジ・エンドとなる。その後の弟子たちの活動ぶりは、「マタイによる福音書」「マルコによる福音書」「ルカによる福音書」「ヨハネによる福音書」に書かれているとおりだから、イエスを心から信じる人も、それなりに信じる人も、全く信じない人も、それを少しでも読みたいものだ。

2014（平成26）年12月9日記